

あとがき

兵庫県立大学 名誉教授 野津 隆志

本年度の研究紀要第二十六輯は、兵庫県内での今日的な人権課題を取り上げた2本の論文と1本の実践ノートを掲載しました。ここで簡単にそれぞれの内容を紹介します。

五百住満氏の『多様化・複雑化する社会の中で人権文化を根付かせるために～令和5年度 人権に関する県民意識調査から考える～』は、兵庫県が5年ごとに実施している「人権に関する県民意識調査」から、今日の兵庫県民の人権意識の実態を示し、今後の人権教育のあり方を提案しています。

調査結果から、兵庫県民の人権意識は、全体として向上傾向にあることが分かりました。特に現役世代においてその傾向が顕著で、職場や日常生活で人権問題に直面する機会が多いことがその要因として考えられます。また、インターネットを悪用した人権侵害に関して関心が非常に高く、特に誹謗中傷や個人情報保護への懸念が強いことが明らかになりました。女性の人権についても、社会進出が進みつつある一方で、根強い固定的な性別役割分担意識や職場における待遇格差といった課題が残存しています。さらにLGBTQなどの性的マイノリティに対する理解も深まりつつあるものの、同性婚の法制化などの法的認知や当事者への差別といった問題は依然として存在しています。

こうした意識調査の結果をふまえ、論文では人権教育が学校だけでなく、社会教育や地域における市民学習の場においても重要であること、特に参加体験型学習や多様な交流を通じて、人権意識を高めることの重要性が指摘されています。

田口奈緒氏による『「私たちにできること」— NPO 法人性暴力被害者支援センター・ひょうごの10年を振り返って —』は、田口氏たちが2013年に設立した性暴力被害者を支援する同センターによる10年間の活動の経緯を紹介しています。同センターは、医療関係者、警察官、弁護士など多様なメンバーが協力して支援にあたってきました。また同センターは、内閣府モデル事業や大岡プロジェクトなどの調査研究事業に参加し、兵庫県内における性暴力被害者支援の体制強化に大きく貢献してきました。

これらの調査研究事業を通じて、田口氏たちは地域間の格差や、被害者が相談しにくいという問題を明らかにし、オンライン相談や地域ごとの支援情報検索システムの開発など、新たな支援を実現してきました。また、学校における性暴力被害への対応にも取り組み、「学校で性暴力被害がおこったら」という手引きを作成し、教職員が適切に対応できるよう支援しています。

同センターはさらに、ジェンダー平等や多様性など人権の尊重に基づいた「包括的性教育」の重要性を訴え、性暴力のない社会の実現に向けて活動を続けていることが紹介されています。

川西悦子氏による実践ノート『ありのままのあなたを受け入れます』は、川西氏たちが創設した自立支援ホーム「若葉」の活動を紹介します。「若葉」は、虐待やネグレクトなどで、家庭に居場所をなくした子どもたちが、安心・安全な環境で生活し、自立の準備をする場所です。

川西氏はかつて、夜回りを通して、家庭環境に苦しむ子どもたちと出会い、彼らに寄り添い、安心できる居場所を作りたいと強く願い、2022年に自立援助ホーム「若葉」を開設しました。「若葉」は、一人ひとりの子どもたちが大切にされ、安心できる「安全基地」です。家庭では経験できなかった温かい食事や、ボランティアとの交流を通して、子どもたちは少しずつ心を開き、笑顔を取り戻していきます。もちろん、辛い過去からくる心の傷は深く、彼らは様々な問題を抱えています。しかし、「若葉」では、子どもたちが「自分は大切にされている」「生まれてきてよかった」と実感できるようサポートし、「若葉」を巣立った後も、子どもたちとの繋がりを大切にしています。

川西氏は「自立とは、一人で何でもできるようになることではなく、自分でやろうという意欲を持ちながら、人と関わり、人に助けを求めて行けるようになること」と述べています。この主張は、社会的弱者に寄り添うあらゆる活動に共通する理念と思われれます。